

訴える。だがどうだろう。
私見では、状況次第で論法が変化する器用な柔軟性こそが、日本特有の節操のなさ、首尾一貫性の欠落、信頼できない日和見主義として、対外交渉で国際的不信を招く原因となる傾向も無視できない。

北米式のessayは、個々人の思想信条には配慮せず、特定論題について賛否いずれかの立場を取らせるdebate訓練とも短絡する。言葉は悪いが、これでは弁舌で正邪を断ずる「有能」弁護士育成を自己目的とする競争・分断社会が結果するのも当然だろう。そうした価値観と対峙すれば、「利他」の徳目涵養を行動規範とする「生活綴り方」由来の日本流「感想文」の論理は、名誉の必敗を喫するだろう。

説得と論破か、それとも配慮の徳目か。その「論理」の倫理的な使い分けは、対立と調整のどちらに重きを置く社会かによっても異なり、両者の止揚は困難だろう。因果律貫徹の世界観と縁起に配慮する日本仏教的？世界観との確執は、南方熊楠から井筒俊彦までの先賢が体験したアボリア。国際的な交渉ごとにあっては、自分の「論理」はそう簡単には通用しない。

かくて人はどの「論理」を駆使すればよいのかに迷うこととなる。本書が突きつけるのはこの冷徹な真実だろうか？

本書が提唱する「経済」「政治」「法技術」「社会」4領域の論理の使い分け（141頁）の前で、筆者は本稿でそのどれを選ぶべきか、当惑を隠せませんでした。

造は、フランスの作文教育でのそれとは水と油。前者が法廷弁論術に模範を仰ぐ直球の合目的説得術ならば、後者では反対論にまで配慮したうえで、出発点の前提を問い直すような思考の展開過程が吟味される。

つまり「欧米」といっても、およそ一枚岩ではない。対照的に、自己主張を嫌う日本語の「感想文」は、事象を時系列で累積させる傾向が著しく、狭い因果律や三段論法に沿った「論理」は敬遠される反面、因果に収まらない話題の豊饒さへの目配りを許す利点もある。ただし日本語では時制と視点とが融通無碍に「揺らぐ」ため、英語流の「論理」的整合性とはきわめて相性が悪い。これは片岡真伊『日本の小説の翻訳にまつわる特異な問題』が縦横に論じている。

そのうえで、本書に触発された観察も加えたい。イスラムを国是とする政治体制下では、聖典の真理が究極普遍的結論。また中国大陸で思想教育を受けた留学生には、事象を強引に正反の対立へと整理したうえで、弁証法の合を唱える優等生もある。だがどちらにも例外はあり、思想教育が社会の隅々にまで貫徹されるとは限らない。

著者は日本流の「感想文」の情操教育上の利点を積極的に認める。だが、それは仮説提示や論証手続きの訓練不在と裏腹となる。また大学入試制度の影響か、日本式小論文は良識的教訓の結論統出を招きがちだ。

そうした多面的な文化比較のうえで、本書は、目的に応じて異なった論理構成を使い分ける技術の涵養を

連載 255

場所と目的に応じて「論理」を巧みに使い分ける技術は、それでもなお「論理的」と見做されるのか？

渡邊雅子「論理的思考とは何か」(岩波新書)に触発されての若干の感想

この国の語学教育では、ながらく正確さが尊ばれてきた。翻訳教室では誤訳の指摘が厳正になされる。だが不思議なことに、その文章がどのように組み立てられているかについては、高校卒業まで、教室で指摘されることは少ない。ましてや文章の組み立てを実地に訓練する機会も、大学入試の小作文を含め、ほぼ皆無ではなかったか。

その結果、文法的には誤謬のない英作文能力のある日本人でも、北米に留学するや、論理的思考力の欠如を指摘される。学童の場合、悪くすると知恵遅れとの嫌疑まで招きかねない。留学体験のある日本国籍者なら、類似の苦い挫折感に浸った向きは、少なくあるまい。本書の著者、渡邊雅子さんは、自らもそうした驚愕すべき事態の現場体験者だった。さらに日本で学ぶ留学生たちも、日本流の「論理」や論理欠如に直面して、裏返し苦労をしている筈だ。

新学習指導要領で学んだ高校生が、来年度から大学に進学する。平成30年度告示の「学習指導要領」では国語科に「論理国語」、外国語科では「論理・表現」が「共通必修」科目。だがそもそも、ここで言われる「論理」とは何を意味するのか。

本書は「論理的思考の常識を破る一冊」と表紙裏にある。その最大の功績は、従来の欧米語＝論理的、日本語＝非論理的で「曖昧」(大江健三郎のノーベル文学賞受賞講演の題名!)という紋切り型を解体したことだ。

北米のエッセイの論理構

稲賀繁美
京都精華大学教員、
放交大学客員教授